

「本日も撮影日和」

from Australia

マック近藤



はじめまして！

シドニー在住のMACと申します。

日本を飛び出して、はや20年。

現在も、撮影の仕事などをメインに生計を立てております。

さて、このエッセイは、シドニーの日系新聞『JENTA（ジェンタ）』に毎月1度連載で書いているコラム「本日も撮影日和」をまとめたものです。ただ2012年1月現在も連載中、今後も随時更新していきます

（このあたりが電子出版のいいところ??）

内容は、皆さまがあまりご存じない撮影コーディネーターという仕事、またそこから垣間見えてくる、ロケでの一コマ等々、、その時その時で思いついたことを、勝手気ままに綴ったものです

お暇があれば、どうぞお気軽にご覧ください。

同調、同情、ご批判大歓迎、、（笑）

これを読めば、今日からあなたもオーストラリア通???!!!

*執筆当時のオリジナルの記事に、ネットならではの利便性で写真の追加などを行っています。また必要により、加筆訂正をしています。

しかし、、、

素人ゆえ、うまく編集などができず、文字サイズがあわなかったり、字体が統一しなかったり、はたまた写真がうまくアップできずサイズがめっちゃめっちゃになったりと、お見苦しい点は、なにとぞご容赦ください！

[*上記JENTA\(ジェンタ\)のウェブ版はこちらです。](#)

マック近藤



マック近藤 プロフィール

愛知県生まれ、旅行会社、オーストラリア政府観光局を経て1990年オーストラリアに漂流、以後撮影コーディネーターを手がける。今までにかかわったプロジェクトは300本以上、灼熱地獄アウトバックがなぜか大好き。現在はシドニー在住、J.A. LINKS代表。

↓JENTAではこんな形で紹介されてます。



VOL.1 撮影コーディネーターって？

(2009年8月)

皆さんこんにちは！シドニー在住のMACと言います。縁あって、こちらでコラムを書かせていただくことになりました、どうぞよろしくお願いします。

オーストラリアに上陸したのが1990年。日本ではサラリーマンをしていましたが、無謀にもこちらに来てすぐ「撮影コーディネーター」の看板をあげ商売をスタート。以来、数えてみたら、300本以上のプロジェクトに関わってきました。これには自分でもびっくり。

撮影コーディネーターというのも変わった仕事、ロケの現場はさながら戦場です。ディレクターさん、カメラマンさんなど、みんなが各々の持ち場で一生懸命。そんななかで我々は、日本側と地元側、両方にはさまれ、孤軍奮闘？

時には、アホみたいにてんぱったり、ちょっとしたコミュニケーションミスで険悪な雰囲気になったりと、ホントに寿命が縮む思い。血压も上がってしまいます(悲)。しかしロケが終わったときは、やっぱり「ビールがうまい！」。みんなで一つの仕事をやり遂げたという充実感というか達成感でしょうか。おかげさに言うと、個々のプロジェクトが「人生の縮図」みたいなものかもしれない。わずかな期間に苦あり、楽あり、感動あり、そして怒号ありと・・・(笑)。

また「撮影」の場合、普段会えないような人に会えたり、行けないところに行けたり、色々な裏の事情なども垣間見たりと・・・このへんは「役得」ともいえるかな。

傍からみると、一見派手な業界に見えるらしく、とかく羨ましがられるのですが、いやいやそんなことは決してない。確かに、時には人気タレントさんにもお会いできますが、これはこれでほんとうに大変な仕事なのです。

そんな撮影現場で見たこと、感じたことを、思うがままに、書き綴っていこうと思います。

そして、皆さんの知らない「穴場」も紹介していければと思います。それでは、しばらくのお付き合いを！

↓シドニー在住の絵本作家、森本順子さんと砂漠ロケの一コマ







VOL.2 現場の緊張感がたまらない！

(2009年9月)

1999年10月20日。

某人気番組のロケ初日。スタッフ一同、シドニーのダーリングハーバーのレストランでいつものようにテンパッていました。スケジュールはこの翌々日から北上、「木曜島」に一週間滞在というもの（感動的な「日本人真珠ダイバーの物語」でした）。

現場ではN女史レポーターがおいしいシーフード料理を実況案内中。そこに1本の電話が私の携帯に。あらかじめの打ち合わせどおり、同僚のRIKAちゃんに現場を頼み、「急用」ということで1時間ほど私は現場を離れることに。そして即タクシーでノースの病院へ。

実は、この日がわが子の出産予定日だったのです。まずは親子の無事を確認。よかった、よかった。そして私はそのまま現場にUターン。立場上ここで「子供が生まれました、万歳！」とはいえない。今まさに凄いプレッシャーの中、真剣勝負がスタートしたばかり。このへんがホントに自分でも、日本人なんだろうなと思います、間違いなくオージーならみんなを巻き込んで先頭にたって喜んじゃうだろうな、ホントに。

まあ自分としては、ロケが無事終了したら、最終日にみんなに報告する予定でした。

しかしその最終日、私のほうから発表しようかと思った矢先、逆に突然のサプライズパーティーが。スタッフみんなから「おめでとう！」。これには、うれしいやら恥ずかしいやら。

思い返すと、やはり無意識にうれしくて、撮影の合間に地元の人たちと「子供が生まれたんだ！」なんて雑談をしていた。通常日本からの撮影スタッフはほとんど英語ができないのでちょっと油断していた(関係者の方々ごめんなさい！)。

ただここでNレポーターが「何かおかしいぞ」と感じたらしい。彼女そこそこ英語ができる。結局そこからばれてしまうことに・・・うかつでした！そして、反対にサプライズを仕掛けられてしまったわけです。まあ、これがわが家の「子供誕生秘話？」、撮影現場はいつもこんな泣き笑いです。

それでは、また。

↓生まれた子供は、男女の双子でした



VOL.3 シドニーオリンピック（2000年）の思い出

（2009年10月）

9月20日はシドニーマラソン。高橋尚子さんの参加が決定しましたね。体力に自身のある方はぜひ走ってみるといいでしょう、きっとよき思い出になるはず。

個人的には、Qちゃん優勝で思いだします、あの2000年のシドニーオリンピックを。

我ながらよく働きました。たまたまこのオリンピック期間、会社としてTBSさんと契約しスタッフたちはそれこそ24時間体制であちこちの現場に出動。このハイライトとなったのが忘れもしない、当時人気絶頂中のモーニング娘。に女子マラソンを応援させるもの。

ただしひとつ大問題が。超人気ユニットのため、彼女たちのスケジュールが取れない。そのためなんと、女子マラソン本番当日(午前、ノースシドニーからスタート)の、同じ朝着の便で彼女たちも、シドニーに着くことに。そしてここから3班に分かれて、途中地点、ゴール地点(スタジアム外、中)で応援する段取り。飛行機がすこし遅れば、それですべては狂う。しかも全員女の子たち、さすがに到着早々でも、やはりメイクは必要ということで、無理やり時間をやりくりし、ホテルの一室を確保。ほんとうに間に合うのだろうか？

さて本番当日。今思い出しても、まさに奇跡でした。なんとこの日に限ってJL便が予定より30分も早く到着、しかも空港からオリンピック会場まで、なぜか道路もガラガラ(オリンピック期間で地元の人たちが車での移動を控えていたことが幸いした)。しかし、予想以上にメイクに時間を食われることに、こちらの胃も痛くなる。そしてここから怒涛のように各部署に移動。後になってもほとんどこの部分思い出せない。そしてとにかく何とか間に合った！

しかもQちゃんは堂々の優勝。さて、このあとは動物園やらシドニー観光を楽しむことに。もちろんカメラも一緒。シドニー在住の日本人ワーホリ君を10名ほど、警備役で手配。それはそれは、ものものしいものでした。

実は私も一緒に現場をやった同僚の黒坂女史も、年齢のせい、まったくモーニング娘。を知らなかった。あとで、みんなに羨ましがられたけど、我々には、心臓バクバクの、なんともいえないうちの日でした。

VOL.4 オーストラリア大陸縦断

(2009年11月)

私の持論ですが、「旅の醍醐味はカルチャーショックにある。日本では経験できない何かに触れてみることに」。そういう意味で、オーストラリアを知る一番の方法は、ずばり「大陸縦断」だと思います。

シドニーやメルボルンの街は確かにきれい。ゴールドコーストやグレートバリアリーフの海もこれまたすばらしい。しかし、あえて言うと、街も海も、きれいなところは世界中にごまんとある。

実は、オーストラリアの大半はアウトバックなのです。まさに、ここが真のオーストラリア。「ここに行かずしてオーストラリアを語ることなかれ」は言いすぎか？

ダーウィンのお隣、大湿地帯カカドゥー、まさに野鳥の宝庫。そしてここから南下、世界でも珍しい時速無制限のスクエアハイウエイ。列車のような「ロードトレイン」が、頻繁に行き交う。小さな車で走っていると、すれ違うとたん、風圧で吹っ飛ばされそうになる。

地球のへそ、ウルルに着けば、フライパンに足をのつけたような熱さ。そう、ここはまさに灼熱地獄、もうひとつハエ地獄なのである。この岩のてっぺんに登り(もうじき登れなくなりそうですが)、周りを見てみるといい。360度何も無い。

まさにちっぽけな自分たちの存在がなんともいとおしく、一時的であれ人生観も変わってしまうというもの。つい最近、あの有名な「ソーラーカーチャレンジ」で、車を追っかけながら縦断し、さらにその思いを強くしました。

さて話はちょっと変わりますが、今もシドニーの日本語雑誌にコラムを書いている人気者オーちゃん。縁あって、2年ほど私のところで働いていました。彼女から日本に帰国する寸前、最後に何か思い出になることをしたいと相談を受け、「絶対縦断しろ、人生観変わるぞ！」と即答。素直な彼女それに従い、なけなしの貯金をはたいて、若者に人気の縦断ツアーに参加。

帰ってきて「どうだった？」ときくと、彼女しばらく無言。ほこりっぽい道路、ワイルドなテント生活と食事。どうも都会派？の彼女にはチトつらかったようで結果的に悪いことをしてしまった。

自分に対する教訓。「自分の思い込みを他人に強要するな！」

↓ウルルの隣、キングスキャニオンの夕陽



VOL.5 これぞ役者根性！

(2009年12月)

前回オーストラリアの醍醐味を知る一番の方法は、大陸縦断と書いた。もちろんもっと時間があれば、大陸一週なんて更に面白いのですがね。安くいく方法はどうにでも考えられる。特に時間の余裕のあるワーホリの子達は楽しむのがいいと思います。

さて、私も仕事で何回か大陸をぐるぐる廻る機会があったのですが、そんな中のエピソードをひとつ。某テレビの番組で、40日間かけてオーストラリアをほぼ一周することに、レポーターは宍戸開さん。

私のような世代はむしろ、お父さんのほう（宍戸錠さん）により親近感を持ったりしますが、それはさておき。開さん、昔パースのほうでホームステイをしていたとかで、たいそうオーストラリアがお気に入り。サーフィンも大好き、カメラもプロ級。さてプロジェクトはクイーンズランド北端からスタート、車2台、総勢8名。海岸に沿い、時計回りにほぼ一周するというもの。コーディネーターは前半が弊社の牧野女史、後半を私が担当することになっていた。

「事件」は中間地点のシドニーで起こった。撮影隊がシドニー到着まえに、牧野から私に電話が。

「近藤さんシドニーでメイクのできる方を手配しておいてください！」。どうも、すでにクイーンズランドで2週間近くロケをこなし、スタッフは全員日焼けで「真っ黒」。

ただストーリー的には、シドニーが出发点なので、開さんの顔が真っ黒なのもちょっとおかしい。そう考えたディレクターが、気を利かして顔のお手入れをメイクさんに頼もうとしたのである。

そして撮影隊は無事シドニーに到着。久しぶりの「都会」で、全員リラックス。そして日本食レストランを予約。ここで私は、かねてからの知り合いのメイク、MEIKOさんと一緒にスタッフを待つことに。

全員到着。

久々の日本食にスタッフも大喜び。さて宴もたけなわのところで、メイクさんを開さんに紹介。開さん、ディレクターからなぜメイクさんがいるのか「ふむふむ」と聞いている（開さんには事前に知らされていなかった）。しかし突然開さんが怒りだした。

「これはドラマじゃない、そんな顔を白くする、、なんてことは無意味」、「自分はもともとジグロだよ、視聴者は気にしない」、「こういう小手先のやり方って俺嫌い」。

すったもんだの挙句、開さんのプロ根性に全員納得。ええい、そのまま全員真っ黒で後半戦に突入しちゃえ！割を食ったのは関係ないのに“終始目がテン”のMEIKOさんでした。

あの時は、忙しいところを無理してかけつけてくれたのに、ほんとうにごめんなさ〜い。

↓開さんを入れて記念写真。

バッセルトンという、オーストラリア最長の栈橋前で。



VOL.6 ソーラーカーレース秘話？

(2010年1月)

明けましておめでとうございます。どうぞ今年もよろしく願いいたします。皆さんにとって昨年はどんな年でしたか？私のほうはなんといっても、35日間にわたる“砂漠ロケ”、ソーラーカーのイベントが一番の思い出でした。

ご存知の方も多いかもかもしれませんが、レース自体は昨年10月25日から約1週間かけて行われたもの。ダーウィンからアデレードまでの縦断約3000キロを、時速100キロで怒涛のごとく駆け抜けるもの。結果は日本の東海大学チームのぶっちぎりの優勝。あのパリダカの優勝経験を持つ、篠塚健次郎さんも、メインドライバーとして参加し花を添えました。

我々取材陣はというと、数チームに分かれ、優勝候補チームや特徴のあるユニークなチームをいくつかマーク。彼らの事前の準備から、調整、レース、その後などを追っかけていました。なかでも個人的に一番印象に残ったのが、ドイツのBOCRUISERチーム。

ここのチームはすばらしかった！レースの1ヶ月前から現地入り。約20名のスタッフは、ほぼ全員学生。もちろんボランティア。キャプテンはユリアン君。

毎日みんな、朝から晩(ほぼ8時から夜の10時までぶっ通し)まで、メカのチェックやら、新しいエンジンを作ったり、テスト走行したりと、食事時間以外は働きっぱなし。疲れないのかな？と単純に思う。

よく観察してみると、若さだけではない。やっぱり、単純にみんな好きなんだ、理工系だし。そして、こういった“目標！”のあるイベントはやはり充実しているんだろうな、グーンとみんなが熱くなることができると納得。

またこのチーム、他との大きな違いがある。効率を考えると普通は3輪だが、この車は4輪、車体も高い。ソーラーカーとしての性能よりも、もっと今後「実用的化できるもの」をと考えて作っているとか。

そう、他のチームがほとんど、記録を狙っているのに対し、このチームのコンセプトはまったく違う。いかに将来実用化して使える車を作るかの一点のみなのだ。

ユリアン君が、凛々しい顔をして言っていた。「速い車を作るのは簡単です、でもそんなのみんながやっていること。面白くない。」「せっかくチャレンジするなら、何か違うことをしたいんだ」。さすがドイツ人？勤勉だし手先も器用。エンジンなんかも100%手作りで作ってる。このあたり日本人と似てるんじゃないでしょうか。

さて、ご興味のある方は、日本のNHKで、まもなく放映、お見逃しなく！（「ワンダーxワンダー」1月16日夜8時からの予定）

↓あくまで実用車を目指す、ドイツのBOCRUISER号。



VOL.7 動物と子供にはかなわない その1-動物篇

(2010年2月)

撮影はいつも大変ですが、なかでも、動物と子供相手はホントにいつも泣き笑いです。そんなエピソードを2つほど。まずは動物篇。

数年前のお話。クイーンズランド州の内陸、LONGREACHというちっぽけな町。ROCKHAMPTONから車でぶっ飛ばすこと8時間。世界中の面白い動物を紹介する人気バラエティー番組のロケ。

この回は赤カンガルー。カンガルーのなかでも一番大きいやつだ。しかも他のカンガルーと比べるとかなり獰猛。なんせ、“立ち上がる”と、大きなものは、優に2メートルを超えるという。いかにでっかいかを撮り、スタジオ司会の、和田アキ子さんと大きさを比較しようとするもの(わかりやすい！)

ただし、野生のカンガルーはとても臆病だしシャイ。いったん我々が近づいたら、かなり遠くでもすぐに逃げ出してしまう。とてもじゃないが、容易に撮影できない。

それで考えたのはこの田舎町の片隅にある、とても質素な自然牧場のようなところ。幸いなことにでっかい赤カンガルーが1匹いた。ここのオーナー、ジョンさんと交渉することに。オーナーいわく、「ううん、立ち上がらせるのは難しいなあ、できるかもしれないし、できないかもしれない・・・」。

実際普段はずっと寝っころがっている。立ち上るなんてことはめったにないのである。でも、そこを粘って何とか撮らせてもらうことに。

さて、当日。ジョンさん以下、4名のスタッフがスタンバイしてくれた。「いつ立ち上がるかわからないから、いつでもカメラをスタンバイさせていてよ！」とジョンさん。私も、ディレクターにしっかり言っておいた(・・・つもりだった)。

そしてスタッフがあの手この手で(笑)、何とかカンガルーを立ち上がらせるようにがんばってくれた。チャンスは意外に早く来た。スタートしてわずか10分ほど。あの赤カンガルーが見事に立ち上がった・・・。ジョンさんたち全員「やった！！」。

そのときカメラを見ると、「あれっ？」まだスタンバイしていない。みんな絶句。ジョンさん「どうしたんだ、なんでカメラが回ってないんだ」。完全に怒号になってる。

ディレクターいわく、「いや、あの、ええと、まずは一番うまく取れそうなカメラ位置を決めようと思って、撮るのはそれからでもいいんじゃないかと・・・」。半泣き状態。

このディレクターさん、まだかなり若く、しかも動物ロケが初めての不運。それで、ロケも3日あるのでじっくりと撮ればいいと思っていたらしい。しかし、そのあと、3日間、カンガルーは我々の焦燥とは別にうんともすんとも言わないし、動かなかった。結局ジョンさんに小さいカメラを預け、クルーは日本に帰国。1週間後、「何とか撮れた」ということで、事なきを得ました。

まあ、動物さんはこちらの指示に従ってくれないんです、やっぱり。

↓こんなかわいいカンガルーではなく、この事件簿は(笑)とてつもなくでかいやつでした



(2010年3月)

いきなり私事で恐縮ですが、現在我が家には、10歳の双子がいます。

まあ、私よりも器用に英語もしゃべるし、一時は「子役」でちょっと売り出してみようかな・・と親としても色気を出したこともありました。

私もこんな職業だし。それで、映画「スーパーマン」の子役キャスティングのオーディションに行ったり、カミサンの大好きな日本の番組「初めてのおつかい」に、たまたま私がチーフカメラマンをよく知っていたので、「何とか海外篇をやってくださいよ、そしてうちの子供を使って！ギャラももちろん要りませんから」なんて懇願したりしましたが(職権乱用?)、今のところ残念ながら何も実にならず・・・。それはともかく。

以前シドニーで、日本の子供向け英語教育のビデオロケがありました。

このロケは何回かやっていて、スタッフとも仲良くなっている。

そして今回はスポーツ篇。マンリーで、男の子供たちがお店でローラーブレードを買い、ビーチ前の専用のコースで遊ぶというもの。それなら、せっかくなので身内で段取りしちやおう。

ということで、わが同輩黒坂女史のご子息ブンちゃんが、当時、たしか8歳。かわいいハーフのお子さんです。黒坂女史も、一瞬「あわよくばこれで子供をデビューさせて・・・ウフフ」と考えたかもしれない。

当日は、マネージャー兼でブンちゃんとお友達2人を連れてきてくれました。

さて最初は順調。

しかし、撮影はよくあることで、テイク1で決まるわけがない、それがテイク2, 3, 4, 5となるうちに、子供の集中力が切れてきた。お母さん(黒坂さん)がついに必死になだめる。

「終わったら大好きなXXXを買ってあげるからね」。でも子供もすでに限界か?ぶっちぎれて泣き出す始末。ここから約2時間、なーんにもすすまない。仕切りなおしのあとでやっとフィニッシュ。黒坂女史も大変お疲れ。「もう2度とこんな甘い夢は見ない」なんて言っていましたっけ。子供より親のほうが数十倍お疲れの様子。

さて後日談。数ヵ月後、完成したビデオが届き、黒坂女史、子供と一緒に観ることに。そしたらブンちゃん、ロケのときはすっかり忘れ、自分の格好いいローラーブレード姿にまんざらでもないよう。「ママ、次の撮影はいつなの?またでたい」だど。これにはママも絶句。親の気持ち、子知らず・・・か!?

↓こんな番組でした、、、



VOL.9 月森さんは凄い！

(2010年4月)

撮影の楽しみの一つは、普段会えない人に会えること。これだから少々しんどくても、やってられるようなものです。今年も色々と面白い人に会いました。

なかでも、この人ホントにすごいと思ったのは月森奨（すすむ）さん。今年の私の初仕事、加藤ローサさんが案内するエコがテーマのTVロケにご出演いただきました。

彼の活躍の場は、サンシャインコーストのカラウンドラ。すでに40才半ばとお見受けしましたが、なんとバリバリのライフセーバーなのです、もちろんこれはボランティア。しかも他にも数多くの「顔」を持つ。医療関係に興味を持ち、日本を飛び出してアメリカに住む。そこで知り合った奥さんがオージーということもあり、その後オーストラリアにベースを移されたとか。そして現在、その奥さんとお子さんたちはブリスベンにお住まい。

月森さんは基本このカラウンドラのビーチ前キャラバンパークの一角（キャンピングカーを常設させている）を買い取って、ここで寝起きをしている。朝は5時に起床、ビーチでトレーニングや瞑想をするのが日課。したがって、一年中全身真っ黒。

同時に、ここでは民宿のようなこともやっている。いや民宿ではないな。日本から、友人、知人、そして少々うつ病や、引きこもりで悩んでいる大人、子供たちも受け入れているのです。

ここは本当にいいですよ。実際、「第二の故郷」感覚で戻ってくる人達がたくさんいるようです。そしてこの「ビーチハウス」の回りには、野菜がたくさん。

旬のものをおいしく頂いているとか。またなんと焼酎やビールも自家製で造っている。一角には廃材で作った雨水利用の露天風呂も。それも「エコ」のためとかではなく、とにかく「楽しいから」、「面白いから」やっているんですって。

まるで子供が、大好きな実験室で時を忘れて夢中になっているよう。とにかく彼は思いついたら何でもやっちゃうのです。

昔のエピソード。身内の方が亡くなられたときに、その葬式をめぐり、お坊さんと喧嘩したんだそうな。最後まで月森さん納得できず、ついにすぐに頭を丸め、お寺に修行に行ったとか、、、アハハ。

また、彼はいま、ビーチフロントに、堂々たるレストランを始めている。それも、コンセプトは、「地元の旬の食料を使って、ヘルシーな日本食をベースに提供する」というもの。

月森さんいわく、「アイデアは湯水のようにわいてくるんですが、経営はだめなのですよ！」、彼にも弱点あり。そこがまたかわいいところでもあり、難しいところかな。

まさに愉快、痛快。こんな人と数日いたら、そりゃ、少々のウツも治ってしまうだろう。

↓右側が月森さん、真ん中は月森さんのお嬢さん。ローサさんと。



VOL.10 奇人、変人、はたまた哲人？

(2010年5月)

またまた内陸に行ってきました。あのクーバーペディーへも！そしてここを訪れるたびに、あの“奇人”、いや私にとっては“哲人”だな・・・を思い出すのです。

クーバーペディーは一般的にはブラックオパールで有名なところ。夏は暑すぎて、なんと住民の半分近くが「地下」で暮らすというとんでもない町(笑)。空から見ると本当に月の表面、クレーターのよう。なるほど映画のロケでもよく使われるわけだ。

ここでの撮影はいつも地元のマープさんにお世話になっている。彼はもともとシドニーで特殊撮影のプロだった。それがここに魅せられ住みついてしまったという変わり者。でも仕事はできるので我々業界人からは絶大な信頼がある。

一度、撮影がはやく終わったとき、近くに面白いおじいちゃんがいるから会って見ないか？とお誘いがあった。彼が面白いというならきっと面白いに違いない、日本からのディレクターやカメラマンさんも期待で胸がいつぱい。

車で走ること20分、そして到着。

みるとこの辺ではごく普通の洞穴の家。出迎えてくれた、そのおじいちゃんは年の頃80歳くらいか。まだ日中なのに、すでに気持ちよさそうに友人とビールを飲んでいる。

まずあいさつ代わりに握手、ううん？なんだこの握力は！むちゃくちゃ強い。思わず私、顔をしかめる。ただ者じゃないな。洞窟に案内されるとそこはやけに奥が広い。部屋もたくさんある。なんと民宿でした。しかし、よく天井を見ると奇妙なものがたくさんぶらさがっている。ん？、なんだなんだ。正解は女性のパンティーだったのです！世界中の女性の。しかもすべて本人たちのサイン入りで(笑)。

日本人女性の名前もいくつかあるぞ。アハハ。

聞いてみると、この人ももとはドイツ生まれ。戦争が嫌で、コネを頼りにここオーストラリアに移ってきた。そしてワニを取ったりしながら生計を立て、流れ流れて、最後はここクーバーペディーに行きついたそう。本人は、「自分は単に臆病だっただけ」と笑っていました。今は、若いバックパッカーの連中に安く宿を提供し、時には合意の下、「国際親善」にも励んでいるとか(笑)。面白い親父だなあ。

しかし、このおじいちゃん、単に面白いだけの人ではなかった。

あとでマープさんに聞くと、凄い方のように。彼こそなんと、あのポール・ホーガン主演の映画「クロコダイルダンディー」のモデルになった方だったそうです。

翌年、また行く機会があったので、こっそり2日ほど滞在を延長し、ビデオを片手に会いに行きましたですよ。そしたらちょっと前に、お亡くなりになったと。合掌。

ああ、あんな人には二度と会えないだろうなあ。もっと話したかったなあ。名前も忘れちゃったけど、あの握力は、まだ忘れません！

↓クーバーペディーの地下ホテルの部屋。1年じゅう涼しい。



VOL.11 ナウル共和国って知っていますか？その1

(2010年6月)

仕事も人生も何が起こるかわからない。ひよんなことから、ナウル共和国に20日間も行くことに。

多分皆様もほとんどご存じないと思いますが、私も聞いたこともない国でした。調べてみると、世界で3番目に小さな国だとか。

車で廻っても1周わずか30分の小さな島(国)。世界で一番観光客に人気がない国という紹介もあった。

とにかくこの国を有名にしたのは、わずか数十年のうちに「天国と地獄を見た国！」ということ。それで、今回日本のテレビでも紹介することに。

実はこの国、さんご礁の上に乗った独特の地形のうえに、アホウドリなどの海鳥の糞が堆積されかなり質のいい「リン鉱石」が取れていたのです。これが1960年—90年代ぐらいまで

。この頃はとにかく採掘して輸出していればよし。それも現場はお隣の貧しい、キリバスやツバルと言った国からの出稼ぎの人たちに任せ、ナウル人は何もしないで左うちわ。あっという間に世界でも有数なりッチな国に。しかし、よいことは長くは続かない。

数十年でリン鉱石を掘りつくし、あとは、まっさかさまの転落人生。いまは国民全員、完全に底辺にいらっしゃる。

さてそんな国への取材でした。飛行機もブリスベンからたった週一便。本当に不便なところ。到着してまずはホテルにチェックイン。これが島でほぼ唯一と言っていいホテル。しかし早速トラブルに見舞われることに。

まずは猛暑の中部屋の冷房が効かない。停電はしょっちゅう。部屋に電話が置いてあるのに使えない(何のためにおいてあるんだ?)。水洗トイレの水が出ない。そしてベッドサイドに電気がない。これには参った。

寝る前に本が読めないのだ！朝食も毎日トーストが3枚、オレンジジュース、そしてコーヒー(もちろんインスタント)。夕食もわずか3種類のメニュー。ビーフかブタかチキン、これにライス。冷房が効かないときも、ホテル側にクレームしても、やさしい笑顔で「できません」。こういうときは怒ったほうが負けなのは、オーストラリアでしっかり教訓としている。

しかし、1週間ぐらいした頃からだろうか？なんとなく、この不自由さが心地よくなってきたのである。

別に冷房がなくても、天井のファンだけで充分だし。トイレの水が流れなくてもくさいだけ、死ぬわけじゃあないし。食べ物も、まあ、地元の人みんな同じようなものを食っているし。

しかもこちらはたったの20日の辛抱でいいわけだし。島中を覆うのんびりした風土。相手の土俵と言うか、あちらさんのペースでこちらも動いていると妙に心地がいいのである。

仕事も、あちらさんのペースにのっかかると、なんとなくすごく遠回りのような気がするのですが、結果的にはこの方がうまくいくことが多かったのも事実。

ひょっとして「足るを知る」と言うのは、こういう世界なんだろうな、そんな気がしました、
続く。

↓ 屈託のない笑顔の子供たち



VOL.12 ナウル共和国って知っていますか？その2

(2010年7月)

天国から地獄を味わっているナウル共和国。本当に不思議な国だ。リン鉱石が出て一気にリッチになったものの、近年掘りつくし、まっさかさまに転落してしまった国。

我々はまずじっくりと島を見るためレンタカーを借りた。トヨタのエスティマだ。

「あれ？」、ナンバープレートがない。聞いてみると、昔は政府でプレートナンバーを発行していたのだが、今やそんな手間をかける予算もなく、やめてしまったとのこと。したがって当然車検もなし。恐ろしいほど、ポンコツ車がたくさん走っている。バイクも多い。

島(国)の人口は約1万人、その半分が失業している感じ。

しかしこのナウル人、なんというか暗さを感じないのである。着ているものはすごく質素、家も質素、と言うかはっきり言ってとても古いしきたない。

また取材を進めていくうちによくわかったのだが、みんな家族がやたら多いのである。60歳ぐらいのおじいちゃん、おばあちゃんになると、もう孫が10人、20人に。この「家族」というのも、親族と言うか血族と言うか、もうぐちゃぐちゃなのである。

いとこの家族も同居とか……。普段は家族の数人が働きに出て、他のものたちを食べさせている。仕事はないけど時間だけあるような若者は、海にでて魚を採ったり、家の裏で野菜などのガーデニングをはじめ。各々自分たちができることをやる。ホント、みんなで助け合っているのである。

面白い話を聞いた。街中に約30件のレストラン、20件の雑貨屋(コンビニのようなもの)があるのだが、なんとこの90%以上は、チャイニーズの経営なのである。

なぜか聞いてみると、ナウル人は助け合い精神の塊のようなもので、人が困っていると物をあげたり……。で、どうにも商売にならないのである。その点チャイニーズはさすが商売人。ナウル人も、チャイニーズとなら、ちゃんと(?)金銭の授受が成り立つようなのだ。ううん、恐るべし、チャイニーズ。

もうひとつ、本当に貧乏なのになぜこんなにみんな明るいのだろうかという、根本的な謎が残った。過去の贅沢三昧な後遺症からくる糖尿病患者だってむちゃくちゃ多い。政府に文句だけ言っている輩もたくさんいる。貧乏は悲惨なことは間違いないのだが、そういう意味ではもっと幸せであるべき日本人のほうが表情は暗いように思う。

ディレクターと語りあかし、なんとなくこの辺が本当のところじゃないだろうか、と思ったのは、まずは一年中あったかいので、衣食住コストがほとんどかからない。

そしてみんなが貧乏なのでしょうがないとあきらめているのだろう。みんなで仲良く一緒に我慢しよう、そんな風に見えた。日本は豊かだが、やっぱり見栄とか、競争意識が強すぎて、自分で自分の首を絞めている人が多いような。それが年間3万人と言う異常な自殺者を生んでいるんじゃないだろうか？

そんなことを考えた旅でもありました。

↓現地で借りたレンタカーにもナンバープレートがない！



(2010年8月)

このところ、日本はワールドカップやら、参議院選挙やらで大変盛り上がっていましたね。マスコミの皆さんの関心も、もっぱらそちらに行ってしまう、我々のようなオーストラリアをベースにしている仕事は、必然的に暇になってしまう傾向があり。なんとも皮肉なものです。

それで、地道に色々な調べもの、リサーチの類をこなしていたのですが、ほとんど取材には結びつかず、残念。

そんな中で一つ非常に面白いタを発見、今回はちょっとそれをご紹介します。

今年のシドニー、例年と比べ非常に寒いですよねえ（ちょっと強引な前フリ・・・?）。

我が家も、リビングこそ北向きで暖かいのですが、ベッドルームなどは南側でとても寒い。そんなときに、こんなリサーチの依頼が舞い込みました。

なんと、「回転ハウス！」。

その名のとおり、回転レストランのように、ごくごく普通の家が、360度回転するそう。調べていくと、場所はシドニーから北、車で約4時間。TULLYという町の近くのように。

すでに多くの地元テレビにも紹介されていたことが判明。早速オーナーにコンタクトを取ることに。ラッキーなことに、このオーナー、LUKEさん、近々シドニーに来るということでお会いできることになった。善は急げ！

LUKEさん、熱心に色々な写真やら設計図でご自慢のお家をご細かく説明してくれました。

彼は現在50歳、素敵な奥さんとお子さん2人の4人家族。

もともとはシドニーで、音楽やイベント関連の仕事をやっていたがいずれ景色のいいところに住みたいということで、1986年に当時所有の音楽スタジオを売り、現在のTULLYの土地を買ったとか。それである程度仕事の整理ができたところで、2004年からこの回転ハウスに着手。2年がかりで完成させたという。

ビデオで拝見する限り周囲の自然環境は抜群。家の形は直径21メートルの八角形。大きな3ベッドルーム、スタディールーム、リビングなどがあり、ここに犬2匹、猫1匹が同居(?)、馬3頭もいるそう。

最初に挨拶がてら、「こんな家を作る」とご近所さんに行ったら(近所といっても、数キロ離れているようですが)、みんなにおばかさん呼ばわりされたそう。

でも完成してお披露目したら、評価も一変。なんとも羨ましがられているそうです。

この家の利点は、どこの部屋からも良い景色を楽しめるだけではなく、例えば大量の買い物をしたときなど、キッチンを駐車場側に動かして楽に搬入するとか、ちょっとしたホームパーティー時、蒸し暑かったりしたら、うまく回転させて風通しを良くするとか、とにかくいろいろあるそう。

でもなんといっても一番楽しいのは、回転ハウスということを知らずに遊びにきた友人たちを驚かせることだとか。

さてさてこの回転ハウス、お値段のほうはいかに？

なんと総工費、約100万ドルほどかかったそう。今現在フランチャイズを考えていて、某韓国の方が非常に興味を持っているとか。日本人にもフランチャイズしたいそうですよ。

ううん、やっぱり私のつたない文章ではこの家の面白さがうまく説明できない(汗)。興味のある方は以下のサイトでご覧あれ。わかりやすい地元テレビによる紹介ビデオもありますよ

。 <http://www.everinghamrotatinghouse.com.au/>

↓なんともユニークなお家です



VOL.14 GBRの魅力、中村征夫さんの思い出

(2010年9月)

短いロケだったが、久しぶりにまたグレートバリアリーフ（GBR）に行ってきた。

ここのサンゴのすばらしさは、やはりオーストラリアが世界に誇れる一つだろう。

GBRといえば、何回か行かせて頂きましたが、自分の中では今年のロケが一番の思い出。TV朝日の2時間エコ番組。題して「エプソンスペシャル」。

ロケの時期は2月。この段取りは本当に大変だった。スタッフは総勢30名近く、この数で移動に次ぐ移動。一番の目玉はGBR。当初H島が候補だったが、この時期はツアーシーズンでかなり混んでいた。

ただ先方の広報が「何とか協力しますよ、、、」ということで段取りを進めていたのだが、ロケ決行わずか一週間前に、「やはり混んでいるので、今回の協力は無理。時期をずらせば何とかするけど・・・」と、なんとも素人のような対応。

30人分の移動などすべてがすでにスタンバイ。これには参った！しかし、ここから怒涛のような手配が始まる、というか、やるっきゃない！

ラッキーなことにお隣のレディーエリオット島がものすごく協力的で、わずか1日で、30名分の部屋やチャーター機、取材用ダイバー、ボートなどを手配してくれた。

まさに捨てる神あれば拾う神あり！（余談ですが、この時期あまりにも私の機嫌が悪いので、カミサンとはしばらく険悪な雰囲気になってしまった！）

そんな中でロケがスタート。実はこのロケ、個人的に一つ大きな楽しみがありました。それは、プレゼンターのお一人が水中カメラマンの大御所、中村征夫さんにお会いできること。

私からみると、オーストラリアのGBRの魅力を知った最初のきっかけは、この中村さんと椎名誠さんペアの「探検隊」の取材だった。

最近、東京湾の水中を紹介しながら環境の大切さを訴えていると「情熱大陸」でも紹介されていたし。

ロケが始まってから知ったことだが、中村さんがGBRの中でも一押しだったのが、実はこのレディーエリオット島。島からの簡単なアクセス（ボートで5分—10分の移動）でこんなすばらしいサンゴや魚たちに遭えるのは世界でもマレ。結果的にこの島に変更してとても喜んでいただけだ。

さてこの中村さん、1945年生まれということで現在65歳。でも、とにかく行動力のある方だ。彼のブログを拝見しても、いつもあっちこっちに飛び回っている。本当に海が好きなんだなあ！そんな彼も若い頃は随分ご苦労されたようですが、ロケ中そんなことはおくびにもださない。

文学の直木賞や芥川賞に相当するような土門拳賞などを多数受賞されているのに、いつも気さくで謙虚。私も、こういう歳の重ね方をしたいものです。

ある晩お酒の席でこんな話もお聞きました。「僕はまだそれほどでもないが、ちょっとしたことをやり遂げ世間的に知られてくると、周りの自分を見る眼が厳しくなる。自分は今までと同じよ

うに人と接しているつもりでも、相手はそう見てくれない。時には尊大と見られてしまう。したがって歳を重ねるとますます、謙虚にならないといけないんです。それでやっと変わらないと思ってくれる」。

「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」、見習いたいものです。

さてここでは、もう一人すばらしい人物にお会いしました。名づけて、“早撃ちカメラマン、クロッキー」次回に続く。

↓さんごに囲まれたレディーエリオット島



VOL.15 仕事はスピードが命「早撃ちカメラマン、クロッキー」

(2010年10月)

前回水中カメラマンの大御所、中村征夫さんたちと廻ったプロジェクトの話しをしました。テレビ朝日の2時間番組。スタッフ総勢30名。

ケアンズ、シドニーそしてGBRのレディエリオット島を約10日間でまわるもの。移動に次ぐ移動、ここを中村さんと、モデルの高橋まり子さんが案内するというもの。

当初、日本から問い合わせがあったとき、クライアントさんにはっきりと、「このスケジュールではこのロケは絶対無理だと思います」と言ってしまったぐらい。しかし諸事情でこれしかチョイスがないのでなんとかお願いします、とのこと。

ううん、だったら「やるしかない」。

ここから怒涛のような段取りが始まり、ロケがスタート。そしてここでもう一つ驚いたのが、これだけの過密スケジュールなので、私のほうは、3カメ(カメラ3台)ぐらいの撮影体制かと思っていたのですが、これがたった一台(まあ、水中班は別でしたが)。

この唯一のカメラマンが、超ベテランの黒木幸一さんでした。

黙々と撮影をしながらも、合間には、縁者さんに話しかけてその場の緊張感をほぐしたり、とまさに八面六臂の活躍。その上にとにかく、撮影が速いのです。

私も何十人ものカメラマンと現場でご一緒する機会がありましたが、彼のカメラワークは本当に神業のよう、決して大げさではなく。

一部アーティストの方々などは別ですが、大半の方は、チームワーク最優先でお仕事をされていると思います。ましてやこの業界はその典型。仕事はリズム。そのあたりが一つ崩れると、他の方たちに迷惑をかけることになる。そのためにも、各々がそれぞれのポジションで全体のペースを乱さないスピードが要求される。

今回のロケなんかはまさにスピード命、そのもの。我々の立場から見ても、行く先々で協力していただいている相手方がいるわけですからその方たちのためにも約束時間を守らなくてはいけない。

そのプレッシャーも相当。そういう意味で黒木カメラマンの速さには助けられました。

彼によると、カメラマンにも「早撃ちカメラマン」と、「遅撃ちカメラマン」がいるそう(笑)。

ちなみに“撃ち”とは“撮り”のこと。どちらも一長一短だが、彼は直感と現場の鮮度を最優先する、断然早撃ちらしい。そのため、日ごろはあまりテープを回さないカメラマンとして、制作陣に愚痴られたり、時には感謝されたりとか(笑)。

一度モンゴルの現場で、あれもほしいこれもほしいと、全方向映像を欲しがると夜、馬冷酒を交わしながら制作論をぶっていたとき、興奮して思わず黒木カメラマンが口にしたのが、「何かを選ぶとは何かを捨てることだ!」。

以来いつも彼自身、ちょっとしたしんどい場面に遭遇すると、つねにこの言葉を自問自答しているようです。

余談ですが、黒木カメラマン取材中にアボリジニーアートに大層興味を持たれ、最後の最後、随

分高価なやつを購入されていた。リビングにおいておくと、絶対いいオーラがあふれるとか。子煩悩でもある黒木カメラマンに幸あれ！

↓ 右端が黒木カメラマン



↓ 走る、走る！！！！



VOL.16 オーストラリアで日本酒ブーム？

(2010年11月)

お酒好きな方ならすでにご存知かもしれませんが、最近オージーが日本酒の味を知りはじめていると思いませんか？

こっちで作られている「豪酒」は別にしても、なんとなくそんな風を感じているのは私だけ?? 先日ゴールドコーストの友人から突然連絡がきました。

聞けば日本酒の輸入を始めたので、販路拡大のためにシドニーに来るといふ。日本酒がブームになりそうだと。

実は、私の住んでいるノース側のCAMMERAYYについて最近その名も、「SAKESAKE」(サケサケと読むそうです、単純)という、レストラン兼バーがオープンした。

別な知り合いも「結構はやっていますよ」と言っていたので、この機会にゴールドコーストの友人と行ってみた。

合計4人なので事前に予約をとろうとしたのですが「予約は取っていません」となんとも強気! とにかく夕方6時の開店直後に入ってみるとこれがビックリ。洋風なおしゃれな作りじゃありませんか。

BGMもジャズだったり。「内装に、いったい幾らお金をかけているんだろう?」他人事ながら心配になってしまう。店員さんもほとんどが日本人女性。元気な声で「いらっしやいませ!」、気持ちもいい。

日本酒も大吟醸をふくめ、数十種類あり充実。食事も、おつまみが中心だが、味がしっかりしていてどれも美味。以前にサリーヒルズでもすごくはやっているお店を1軒発見したが、それと似た驚き。しばらく飲み食いして楽しんでいるうちに、2時間ほどで満席になっていました。

ほとんどが地元オージーのカップルやら家族連れ。もちろんワインも置いてあるが、グラスで色々な銘柄の日本酒をチビチビ飲んでいる方たちが多い。(お値段のほうはかなりお高いので、我々庶民にはつらいかも)

ううん、オージーの好みがどんどん変わっているのを実感。というか、最近はテレビ番組「マスターシェフ」もはやっているし、かなりオージーも味に対するこだわりが強くなり始めているようだ。

さて、店の方と話しをしてみると、なんとアメリカ人1名と韓国人2名、計3名のオーナー経営だとか。

日本人が入っていないのがチト寂しいが、いやはやみんな嬉しい。

さてこの日本酒ブーム(まだブームといえるかどうかは怪しいですが)どこから来ているんだろうか?

「豪酒」とか、きっかけはいくつかあるようですが、どうもここ数年のオージーたちの日本ブーム(ニセコとか)で、日本を訪れたオージーたちが、日本の食文化に触れ、その繊細な酒の味にも感化され、彼ら、彼女達のクチコミからじわじわとブームが始まった・・・というのが真相のようだ。

近々この取材を行う可能性もあるので、そのときは、徹底的にどんなきっかけでこんな動きになってきたのか、調べてみたいと思います。ただし、これは仕事、あまり飲み過ぎないように気をつけねば！

↓こんな看板のお店が増えている



(2010年12月)

すでにご存知の方も多いかと思いますが、ここオーストラリアにはあのスタジオジブリのアニメの舞台になった(と思われる)場所がかなりあります。

例えば、トトロ、ナウシカ、ジュピタ、紅の豚、もののけ姫、魔女の宅急便などなど、数えあげたらきりがなほ。

そんななかから私が撮影で遭遇したエピソードをひとつ。

昨年未のタスマニア。この島の魅力はなんと言っても、世界で一番水がきれい、空気がきれい。その自然の雄大さや大きさは日本の北海道にも似ている。むかしここを訪れた作家の畑正憲さんがこの島を“南海道”と名づけたのも頷ける。

さて、この時は紀行番組の取材。まずは北の玄関口ローンセストンからスタート、ペンギンの街やら、壁絵の街をドツと撮影したあと、南の州都ホバートまで南下。

せっかくなので車で行こう(約4時間)ということに。そしてちょうど中間地点にあるこじんまりした、かわいい村ロス(ROSS)に到着。そう、ここが実は「あの」ケーキ屋さんのあるところだったのです。

子供たちも大好きで何回も観たあの宮崎アニメ、魔女の宅急便。この中に出てくる、キキの働いた、そして泊まったとされるパン屋さんのモデルがここにあったのです。

到着後お店を拝見。まだパンを釜で焼いているのですね、ちょっと嬉しくなってしまう。ホントに、いいにおい!そしてここには、キキの泊まった屋根裏部屋まであった!オージーのオーナーに聞いてみると、彼は1995年にこのパン屋を買ったとか・・・そのときは、この噂のことは全然知らなかった。

そうこうしているうちに、日本人がずいぶん来る(最近は韓国や台湾の若者も多い、やはりアニメパワーの凄さでしょう。実際取材のときもたくさん来ていた)。びっくりして調べてみてやっとこの秘密が分かったそうです。

屋根裏部屋を見せてもらいました。ううん、確かなかなか似ているような。普通の人泊まれるそうで、1泊しても、朝食つきで\$80ぐらい。10年前に小柳ルミ子さんが来たとか、1年前に、グルメの太っちょ(失礼!)石塚さんが来たとか・・・そんな話も楽しそうにしてくれました(そのときの番組ビデオもおいてある)。

面白いことに、同行してくれたタスマニア在住の日本人ドライバーさんいわく、「日本人の旅行者の方たちがタスマニアに来たとき、同じ日本人に遭遇する可能性が一番高いのがこのパン屋さんです」・・・ですって。恐るべし、宮崎パワー!!!

アッ、よくいわれることですが、この話あくまでも噂ですよ。ジブリ側は、いつも肯定も否定もしない「ノーコメント」だとか。まあ、でもこのたぐいのことは楽しんだもの勝ちでしょうかね。

↓魔女の宅急便のモデルになったと噂されるパン屋さん



↓二階のベッドルームにはこんな人形も



(2011年1月)

あっという間に2010年ともおさらばし、2011年を迎えてしまいましたね。皆様、お元気でしょうか？

さて私はこの原稿、実は年末ロケの最中に書いております。今回は2週間に及ぶ長期ロケ。場所も、クイーンズランドのフレーザー島から、ビクトリアのグレートオーシャンロードまでとかなり広域を駆けぬけながら撮っております。ふと振り返ると今回のロケもその準備は大変だった！ 普段の仕事って皆さん色々なんでしょうが、この撮影の仕事も同様。基本の事前のリサーチとか段取りも、日本から高い予算をかけてロケにくるわけですから、現地に来て「えっ？」というようなミスがあってはいけない。したがってできるだけことはやる。しかし、日本人と比べあまり勤勉、正確とはいえないオージーたち。その中間に入って、調整、仕切るのがこれまた大変。よくポジティブシンキングなどといわれていますが、そういう意味では、私のほうは超ネガティブシンキングかも。

事前段取りでは、まずは考えられる限りあらゆる状況を想定する。飛行機が遅れたら、天気が悪かったら、担当者がいなかったら、タレントさんがわがままだったら（笑）、などなど、きりが無いぐらいあらゆる状況を考えて、そんなハプニングが起こった場合はどうするか、なんてことを真剣に考え抜く。

そして直前にはロケスケジュールを見ながら、自分で何回も何回も頭の中でシミュレーションをする。そんなことで、若い頃はロケ前日なんて、てんばって全く眠れない、なんて当たり前でしたし、ロケ中もほとんど食事がのどを通らない・・・なんてこともしょっちゅう。

「やっぱり俺はこの商売向いてないのかなあ?」「才能ないのかなあ?」なんてことを自問自答する毎日。ホント、因果な商売ですね。

しかし、だから凶太そんな人材が向いているかということこれもまたちがう。単なるポジティブシンキングの人(なんでも何とかなるだろう、、みたいな)はやっぱりだめ。

現場でちょっとしたトラブルが起こると意外と対応できないであたふたしてしまう。かといって超まじめな子も、相手からの無理難題に素直に対応しすぎて（それ自体、決して悪いことじゃないんだけど!）おかしくなっちゃう。まじめさが仇というか、それで潰された子もいる。

矛盾するようですが、繊細な神経に、凶太さが程よくミックスしたような、そんな人が一番いいかも。まあ、そんな優秀な子達はもっと別な職場があるんでしょうが。

しかし、そんな環境なのに、自分を半分ごまかしながらもやってきたのは、きっと、一仕事のあと、“番組”などで、その結果がはっきりでること。そしてやっぱり、他の仕事と同様、月並みですが、終わったときの充実感と、ビールがおいしいことぐらいでしょうか。まあ、そんなことで、今年もよろしく願いいたします。

現在グレートオーシャンロードを走行中！



(2011年2月)

オーストラリアの車にカンガルーバー(ブルバーとも言います)がついているものをよくみかけませんか？

シドニーなどの都会ではあまり必要はないのですが、いったんアウトバックや田舎に行くと、これなくしては夜のドライブはかなりきつい。

昨年末の2週間ロケ。我々はビクトリアのグレートオーシャンロードを飛ばしていた。

その日もあつという間に1日が過ぎ、さあ移動・・・というときはすでに日没時。みんなもう疲れていることもあり、早く宿にたどり着きたい一心で少しスピードをあげる。

そのときでした、「ドーン!」。

やってしまいました。いや、やられてしまいました、カンガルーに。

いきなり真横から飛び込んできたためこちらも避けようがない。カンガルーにやられたのはこれでもう3度目。それほど、田舎に行くとカンガルーは多いのです。

ううん、ここであつたの一番衝撃的な「事件」を思い出しました。

もう10年以上前になるかなあ。

あるロケで、我々はアリススプリングスから一路、ウルルに向かっていて。車はパジェロが2台。往路は約450キロを快適なドライブ。

ウルル到着後、一通り撮影しここで一泊。そして帰路。

せつかく4WDでもあるし、オフロードをカッコよく走るシーンを撮ることに(なにせ三菱さんはスポンサーで、カッコいいドライブシーンを撮るのは約束事)。

そのため、あえてハイウェイを外れ「オーストラリア」らしいアウトバックのオフロードを走ること急遽決定。途中カッコいい場所が何ヶ所もあり、そのたびに撮影。そうこうしているうちにあつという間に日が暮れてしまった。アリススプリングスへはまだ200キロ以上ある。かなり焦り気味で帰路を急ぐことに。

そして30分も走った頃だろうか。僕は1台目の車の助手席。運転は、地元のプロのポール。

あるカーブを曲がったところで、道路のど真ん中にいきなりでかい黒い物体が!

ポールもビックリ、急ブレーキでハンドルを切るが、路肩に突っ込む。その物体、よく見るとなんと、水牛(バッファロー)でした。これには参った。

しかし問題はその後。

車が路肩に突っ込んでだせない。ここいらは砂漠気候で日没後はどんどん寒くなる。しかも対向車なんて1日走っても数えるほど。もちろん携帯も全く使えない。食料もこんなことを想定していないのでストックゼロ。コトの重要性を知ってみんな青ざめました。

ところが何とかなるものですね。もう1台のパジェロでウインチをつかいみんな(総勢8名)で引っ張り出したら、何とか動きました。この時は、本当にスタッフの頭数が多いだけでも、気分的に安心感が生まれるということを実感。

アウトバックの夜の運転は本当に危ない。実際レンタカーも、夜の運転で動物にぶつかった場合、

保険の対象外という契約も多い。皆さん、こんなことがあったら気をつけましょう！

ちなみにそのあと、1時間ほどアリススプリングスまでゆっくり運転していったのですが、100匹以上のカンガルーを避けながらのドライブ。まるでテレビゲームのようでした、、ふうっ！

↓グレートオーシャンロードの絶景ポイントで撮影



↓有名なエアーズロック(ウルル)にあるカンガルー注意マーク



VOL.20 究極の1人口ケの時代の始まりか？

(2011年3月)

先月のとあるロケ。

シドニー1日、メルボルン2日、合計3日間の短いロケだったのですが、日本からのスタッフがわずか1名、たったの1名だったのです！

さすがにこれは僕にとっても初めての経験でした。

といっても、これ別にマイナーな番組ではなく、某民放のしかもゴールデンの番組！

通常の撮影というのは ディレクターさん x 1名、アシスタントディレクター (ADさん) x 1名、カメラマンさん x 1名。そして音声さん x 1名。こんな4名体制が普通。タレントさんなんか加わると一気に頭数は増えますし、まあこのところ景気が悪くなったといっても、すくなくとも日本から3名。

あるいはディレクターさんだけがこちらに来て技術さんを現地で1-2名雇うというものでした。

しかし、今回はなんと、たった1名です (くどい?)

「ついにここまでできたのか！」というのが僕の素直な実感。

その理由は明白。一つは相変わらず日本の景気が悪く番組予算が大幅に縮小されていること (もっと大きな意味で、メディア自体の形が変わりつつあるのも事実ですが、それはいったんおいといて)、もう一つはカメラの性能が飛躍的にあがっていること。

そのためカメラマンが撮影しなくとも、制作スタッフが「チビカメ」(プロ仕様のでかいカメラではないやつ)でそれなりの画像が確保できてしまうこと。

で、今回の現場をディレクターさんと2人でやったのですが、彼はまだわずか30歳。しかし制作とカメラと両方を立派にやり遂げていました。しかもなんと三脚も持ってきていない。(これも僕的には初めての体験、画面がぶれてしょうがないんじゃないかとも思いましたが・・・)

彼いわく、「本当に素晴らしい映像がメインの番組は別にして、普通の番組は、もうこれでいいんです」

「贅沢を言ったらきりがない」

「画質もけちがつくのは意外と身内だけなのです、一般の視聴者にはそれほど違いがわからない」

「だったらこのせちがらいご時勢、その予算を他のほうに回したほうがよっぽどよい番組ができる」

まあ、一理ありますね。確かに三脚がないと、皮肉にもフットワーク自体は格段によくなっていました。

撮影も非常に早いし。まあ、こうやってみんな生き残りを考えているのでしょう。

ということは、僕たちの仕事(撮影コーディネーター)も、通訳、ドライバー、交渉人(?) などなど、1人何役もこなさないといけない時代になりました。

「大変だ、大変だ」ということで周りは悲観的なことばかりですが、ここは一つ、思いっきりポジティブに考えたほうがいいのかももしれない。

同じ仕事を続けるにしても、いかに今まで恵まれていたのか、これからは、知恵を絞ってどれだけスリムにやっていけるかが勝負になるだろうし、そこらへんを考え抜かなくてはいけないのでしょう。

それでも、やっぱり「あきまへん」になれば、商売替えも必要になるかも。しかし、改めて、凄い「変化」の時代に生きているなど痛感しております。

最後に今回はちょっと宣伝です。

このたび、「ACTUS NEWS」という、オーストラリアの専門のニュースサイトを立ち上げました。

色々な楽しい、役に立ちそうなニュースをできるだけ毎日発信しております。

ご興味のある方はぜひ覗いてください。 <http://actusnews.net/>

VOL.21 日本の震災その後

(2011年4月)

このたびの震災(地震、津波、原発)、被災地の方たちには本当に言葉がありません。

深くお見舞い申し上げます。

僕もあの3月11日、最初のニュースを知ったのは、TWITTERから。

たまたまヨガをやっていて、終わったあと何の気なしにTWITTERをチェックしてみると、すごいことになっていた。急いで家に戻り、ダメモトでテレビをつけると、すでにABC24で緊急放送。

あまりのショックでしばし呆然、言葉もでませんでした。

しかし、海のこちらで暮らしているとはいえ(いや、だからこそか)、自分たちがやはり「日本人」だなど実感しました。説明できないけど、DNAというか。これは皆さん同様だと思います。

ほとんど1週間ぐらいはテレビ、ネットをずっと見続け、カミサンも体調を崩してしまったぐらい。

さて、これから。日本のこの影響で、僕らの撮影業界も当分はだめだろうし、旅行業界も同様厳しいと思います。

このところ日本からのインバウンドがいまいちのため、旅行会社によっては日本へのアウトバウンドに活路を求めていたところも大きなダメージ。

悠長なことは言っていられないですが、こんなときこそ一度自分の内面を見つめ、リセットをする必要があります。

ヨガで「断捨離」という言葉があります。この際すべてを見つめなおし、できるだけ身の回りから整理してゆく。モノも欲も人間関係さえも、そんなことを考えるよい契機かもしれません。

しかし、僕たちはまだしも、被災地の方たちはまだ何十万人という単位で避難されています。

まともに住む場所もなく、今日のことしか考えられない極限状態の方も多にお察しいたします。

メンタル的にも相当きつはず(シドニーの知り合い家族がたまたまそのとき東京にいて、ホテルの30階に泊まっていた。地震のときは生きた心地がしなかったそう。そしてシドニーに戻ってきた今でも小さなおじょうちゃんに夜中にうなされて泣きだすそうです)。

そうそう、震災中の3月17日村上龍さんがニューヨークタイムスに投稿された記事があります。そこにこんなことが書いてありました(以下抜粋)。

私が10年前に書いた小説には、中学生が国会でスピーチする場面がある。「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」と。

今は逆のことが起きている。避難所では食料、水、薬品不足が深刻化している。東京も物や電力が不足している。生活そのものが脅かされており、政府や電力会社は対応が遅れている。

だが、全てを失った日本が得たものは、希望だ。大地震と津波は、私たちの仲間と資源を根こそぎ奪っていった。だが、富に心を奪われていた我々のなかに希望の種を植え付けた。だから私は信じていく。

VOL.22 日本に来ています

(2011年5月)

皆さまお元気ですか？

実は今この原稿を書いているのが4月28日。日本に来ています。

思えば今年は災害が続いていますね。ブリスベンの洪水に始まり、ケアンズのサイクロン、そしてNZクライストチャーチの地震、さらに日本の震災と。僕も取材で振り回されました。

さて今回日本に来たのは、個人的な用事もあったのですが、この大震災を自分の眼でどうしても確認したいという強い衝動があったから。

いくら長くオーストラリアに住んでいても、そこはやはり日本人。

このあたり皆さんも同様ではないでしょうか？

しかも今回もう一つ実感したのは、僕の故郷は愛知県の片田舎なのですが、この故郷が好きな「イナカモノ」の顔だけではなく、やっぱり日本そのものを意識せずにはいられない、「ニッポンジン」としてのなにか、ううん、DNAのようなものを持っている自分を見つけたこと。震災は被災地だけの問題ではなく、完全にニッポンジン全員の切実な問題になっているのです。

今回の災害は地震、津波だけでも衝撃的だったのに、その上、原発事故。僕も昔は、広瀬隆さんの「東京に原発を」なんて本を真剣に読んでいたほうだったので、まずは「大変だ」「ついに来ちゃった」と思ったのが正直なところ。

その原発状況と情報、こここのところずっと日々めまぐるしく変わり、ここに至ってもまだ楽観論、原発推進派もかなりいるようです。

しかし、僕は正直なところ最終的にどの程度の被害になるかわかりませんが（誰もわからない）実態がなかなか目に見えないものだけに、その将来への影響を考えると非常に不気味。

いつ症状などがでてくるかもわからない。奇しくもあのチェルノブイリから25年とかで、その後現地はどうなっているのかなどの特集も多くやっている。

識者は福島とチェルノブイリとは比較できないとも言っていますが、多いに参考にすべきだと思う。まあ僕たちの世代なんかはまだいいのですがもっと若い世代や未来の子供たちのことを考えると、やはり推進派は無責任だと思います。

ある統計では、原発への依存率はドイツが20%、日本は30%。そのドイツは即廃止決定をしました。しかし日本はまだまだ。「経済発展に支障が出る」「代替エネルギーがない」「不便だ」なんて理由はやはりおかしい。次の世代の若者たちのためにも、我慢でも何でもやるべきだと思いますが僕の考えおかしいでしょうかね？

そういえば、我がジュリア・ギラード首相が4月22日に宮城の被災地を訪れ、日本でも大きなニュースになっていましたが、被災地を訪れた外国首脳は彼女が初めてだそう。

多少パフォーマンスが入っているとしても、とても勇気がいることだし、日本の震災に対しての豪州のある種の「スタンス」を非常に印象づけるものになったと思います。

特に、大半の外国勢が日本を敬遠し始めている時期だけに、これだけでも、ご立派だと思います。

VOL.23 TETSUYA さんの凄さ！

(2011年6月)

先日ある番組ロケで、久しぶりにシドニーのテツヤさん (TETSUYA'S)にお伺いしました。世界で最も予約の難しいレストランの一つ、オーストラリアで最も成功した日本人、、、とか、その評判は圧倒的。

今回彼にお会いしてまたまた懐かしい思い出がたくさん蘇ってきました。

通常撮影でお伺いするときは、テツヤさんにほぼ半日-1日時間を割いていただき、レストラン全般、オープン前の慌ただしさ、お客様の様子、そしてテツヤさんのインタビューなどを撮るのが普通。

ただ、一度、“情熱大陸”という番組で、テツヤさんを1週間ほど徹底的に追っかけまわしたことがあります。このときは、彼がいろいろな食材を仕入れたり、ジョイントベンチャーで開発しているタスマニアなんかにまでついていったりと、それはそれは盛りだくさんの充実したロケでした。

日本からのスタッフもなかなかユニークな強者たちで、あとになっても、テツヤさん自身「あの撮影が一番面白かった！」と言ってくれているので、こちらもうれしい限り。

で、そのときは、カメラがないところでも、呑んだり食べたりしながらいろいろとプライベートな話題で盛り上がりました。

テツヤさんの凄さはあちこちで語られているので今更僕が説明するほどのこともないと思います、いろいろな武勇伝もたくさん。ただ一つだけ僕がとても印象に残ったことを本人のご承諾なしに(笑)ご紹介。

テツヤさんは、もちろんシェフとしての腕前は当たり前前に凄いのですが、彼のマネジメントの“顔”もこれまた凄い。

彼自身、何もなかった自分(彼は日本で、シェフの経験ゼロ、それでワーホリでシドニーに来て皿洗いから始めた)をここまでにしてくれたオーストラリアに非常に感謝している。国籍も、既にオーストラリアに変更。

ただ初期のころ、彼はスタッフを使う部分で相当苦勞をしたよう。

ご存知の通りオージーはかなりのんびりしている。日本のような徒弟制度もない。

そんなスタッフを使うのは初期のテツヤさん(英語も多分ままならず)としてはそうとう難しかったと思う。「あれっ？」というようなスタッフがいても、なかなか首を切れないのがこちらの事情(法律的にも)。

しかしテツヤさんには、「お客さん第一主義」とでも言うべきしっかりした哲学があった。そのため、意にそぐわないスタッフがいると、彼(女)に説明してそれでもどうしようもない場合は、まずは、他のスタッフへの悪い影響の方を心配したそう。こんな言い方をしていた。

「腐ったリンゴを一つ入れるとすぐに他のリンゴも連鎖して腐ってしまう」

そのため、テツヤさんはどうしようもないスタッフの場合は、即刻首を切ったという。

僕もこの国に長いので、スタッフを切る難しさはよくわかる。余分な出費や下手をすると、逆に訴えられることも多い。

そんな危険を冒してでもテツヤさんがこだわったレストランに対する哲学みたいなものが垣間見える。やはりこれ以上は引けないとでも言うべき“覚悟”があるのでしょうか。

そんなテツヤさん、今ではスタッフはほぼ全員がオーギー。

スタッフが自主的に和気あいあいと仕事をしている。「強制」でもなんでもなく、テツヤさんなりの哲学と、「チームワーク」の大切さが浸透しているのだ。



(写真は[テツヤさんのweb ページ](#)より)

(2011年7月)



撮影の仕事をしていて、数少ない楽しみの一つは普段会えない人たちに会えること。それも日本人、オージーを問わずに。

前はシドニーのテツヤさんをご紹介させていただいた。

実はそのテツヤさんの口添えもあって、今回ご紹介する内田真弓さんに会うことができました。これが数年前。しかしまたまたご縁があり、このたびあるロケの最中にお会いすることができました。

会うたびに感じる彼女の「ド迫力」は健在。

何せ、僕の仕事仲間のMさんでさえ（ちょっと怖いぐらい仕事ができる頼りになる男なのですが）「いやあ、内田さんにはかなわない！」とっていました。

彼女、日本は茨城のお生まれ。元々は某航空会社のスッチー（死語？）、しかしその恵まれた生活に疑問を持つようになり一念発起！自分自身を見つめたいということで外国で暮らすべくまずはオーストラリアに語学の勉強にきたとのこと。

そこでアボリジニーアートとの衝撃的な出会い。そのまま、アーティストの住む砂漠へ。アボリジニーたちの世界に飛び込む。

そしてなんとついにはイニシエーションまで受けてしまったそうです。イニシエーションですよ、言ってみれば彼らに“同化”してしまったわけです。

ちょっと余談ですが、僕たちの撮影の仕事、いろいろな無理難題も数多くあります。「あれを探してくれ、これを探してくれ」と。そんな中で特に我々コーディネーター泣かせのダントツ一位が、「アボリジニーの方達の生活を撮りたい」というもの。

何せ彼らの住んでいるところは入りこむのが非常に難しい。

普通のアプローチではまず無理。長老の方にお伺いを立てるのが普通なのだが、ここまでなかなか行き着かない。行き着いてもいつになったら返事が来るかわからない。

さらに撮影許可がでても今度は本番に彼らがスタンバイしてくれているかどうかかわからない。「誰々が病気になったのでそのお見舞いに行っちゃった」とかで突然居なくなることも。なんというか、時間の観念、人生の概念、そういったものが我々とは全く違うのだ。

そんなことで我々コーディネーターはこの問い合わせを受けるといつも胃が痛くなる。

しかし、だからこそ彼らの生き方は面白いともいえる。アートも非常に刺激的である。何せ4万年の歴史と伝統があるんだから。今この時代だからこそ我々が学ぶことがいっぱいある気もするのだ。

そう、そんな世界に内田さんはまさに体一つで飛び込んでいったのです。面白くないはずがない。

きっと自分自身の内面を見つめるには最高の場所だったんだろう（と勝手に想像していますが）もうトカゲでもなんでも食べてしまったそう。こういった世界もいいな！と思う人は僕も含めきっと多いだろうけど、彼女はそれをやってのけたのである。

その彼女、今では超忙しくなり、日本でもいくつかの展示会を成功させている。最近は、アボリジニーアート以外に、「食」の伝道師にもチャレンジしているとか。

実は今回の日本の震災、彼女の実家が茨城ということもあって大変だったようだ。でも、今回の再会中（シドニーの海に見える某レストランで）その話をした10分ほどはちょっと悲しげでしたが、それ以外は相変わらずの恐いもの無しのド迫力、この女性と知り合えば間違いなく、元気のお裾分けをしてもらえます。僕が保証人（笑）。

* [内田さんをもっと知りたい方は、彼女のウェブサイトどうぞ、ここ。](#)

（上記写真もここから拝借しました）

VOL.25 あるアボリジニー女性との出会い！

(2011年8月)

ある撮影の仕事で、6月と7月、2回にわけてダーウィン、カカドゥーに行ってきました。熱帯雨林に囲まれた世界遺産であるすばらしいところ。そしてまた野鳥の宝庫としても有名。

しかし今回の仕事、僕の気持ちは別な方にも少し気をとられていた、、、

1ヶ月ほど前、とあるテレビ番組で、オーストラリアからざっとこんなレポートをしました。

「カカドゥーは世界的にも有名な観光地ですが、ここに別な意味で有名になってしまった“レンジャー鉱山”があります。実はここウラン鉱山。オーストラリアは世界イチの埋蔵量を誇り、ここはその象徴的なところ」

「日本の東京電力も絡んでおり、ここで採れるウランが一部日本にも送られています。そしてつい最近、ここの鉱山の所有者でもある、地元のアボリジニーの長老の女性から国連宛に手紙が届き、『自分たちのところからとれたウランが間接的とはいえ、今回の福島の影響につながったことをとても悲しく思う。そして自分たちは今後この周辺でのこれ以上の鉱山開発をしないよう、できるだけ周辺に呼びかけていく。』とコメント」

「実際に周辺のアボリジニー仲間でも、鉱山開発の権利だけ売れば一夜にしてオーストラリアでも指折りの億万長者になるのは目に見えているのですが、彼女たちは今後そういう方向には決して行かない、と強調していました」

こんなレポートをしたあと、ここカカドゥーにきたのですが、たまたまヘリで空撮の機会がありました。空港のすぐ隣がこの鉱山。車で走っている分には看板があるだけで立ち入り禁止だし、全くわからなかったのですが、「空」から見たらなんとそのあまりの巨大さに絶句。こんなところに日本との接点があるのだと。

さて、そして今回のロケでのもう一つの出来事。

実はアボリジニーの方々の撮影の機会があったのですが（まあ、いつものように段取りは大変でしたが、汗）その中に、バッグやバスケットなどを、伝統的な手織りで作る女性がいました。名前はタニヤさん、45歳。とてもすてきな笑顔でこちらにどンドンと話しかけてくる。「日本の震災は今どうなの？」「日本のどこからきたの？」などなど。



聞いてみると実は彼女のおじいちゃんが日本人だとのこと！

おじいちゃんの名前は「ナオキ」そしてお父ちゃんの名前は「シンゴ」と言っていた。どうもおじいちゃんは戦争で日本から来て（オーストラリアから見たら、唯一侵略を受けた国がわが日本だったのです！）捕まり刑務所に入っていたそうです。そしてその後、彼女のおばあちゃんと結婚することになったとか。

そんなことを話す彼女に屈折のようなものはなかった。

でも、やはり自分のルーツを知りたさそうで、いずれ一度日本に行くのが夢だとか。そして今回の日本の震災は本当に残念だと。

この日ばかりは僕も撮影の仕事を終えて、しばし話し込んでしまいました。

日本がこんな状況になってしまった今、先住民アボリジニーの生き方に何かしら学ぶべきものがたくさんあるような気がしてなりません。そういえばこのアボリジニーの人たちを紹介してくれたダーウィン在住の白人、コリンさんはこんなことを言っていたなあ。

「They are the richest people without money」



(2011年9月)

シドニー郊外のブルーマウンテン。1,000メートル級の山々で世界遺産。

シドニーに来れば、まずはここというぐらいの人気観光スポット。

我々もよくロケに行くのですが、ここの問題は天気。とにかく“山”だけに天気はいつも不安定。先月も短いロケで行ったのはいいのですが、3日間滞在してすべて雨。(うち1日はジェノランケーブスという鍾乳洞だったのでまあ、ここはことなきをえたのですが)あの有名なスリーシスターズも雨と霧だと、全く「絵」にならない!



(↑ 鍾乳洞での撮影)

この時ばかりは苦肉の策として、ある豪華ホテルの内部を中心に撮ったりして、まあごまかしたわけです。ホント、天気ばかりは誰の責任でもないの、スタッフ全員ストレスのもって行き場もなく、気苦労が耐えない。

それでも唯一今までに天気を逆手に取ってがんばったのはある関西のバラエティ番組(さすが!)。2日いても、最悪の天気。しかも霧が凄く5メートル先も見えない。

この時は若いディレクターさん必死に考えていましたね。で、やったのは、お笑いタレントさんにブルーマウンテンのIMAX(ごめんなさい、今は名前変わっているかも。あの大画面シアターです)に行ってもらい、壮大なブルーマウンテンを“映画”で楽しんでもらう。

で、オチが「本来はこんな雄大な景色が見られるのですが、実は僕たちの普段のおこないが悪いせいか、外は大変な状況なのです！」でカメラパーン、外の景色。霧で、前方が全く見えない!(ココで笑い、、、)。今となれば楽しい思い出です。

お天気のお話でもう一つ。これは僕もトラウマになっています。

10年以上前のケアンズ。ある旅番組の撮影。日程はケアンズ、そしてダーウィンの各4日間。時期は12月。確かに雨期の始まりで少々ヤバいとは思っていました。そして初日、なんと運悪くケアンズにサイクロン(台風)が上陸。そして毎日が暴風雨。4日間全く何も撮れない。こんな時に限ってスタッフ全員いい人ばかり(泣)。で、全員で考えた結論が「とにかくいったんダーウィンに行こう。そして4日後どうせ、ケアンズ経由で日本に戻るんだから、プロデューサーと交渉して、あと2日だけ滞在を延長してケアンズロケを帰りに追加してもらおう」。確かに、サイクロンも、徐々に北上し始めていたし、これが唯一のベストオプションかなと。サイクロンのあとも、台風一過じゃないですが、すごく天気がよくなることも多いですしね。

で、ダーウィン。ここは予想に反して毎日がピーカン。絶好調で4日間のロケが終了。そしていよいよ、ケアンズにまた戻ることに。

で、ケアンズに戻ったら!

なんとまだ、サイクロンがいたのです。いや正確には、一度北上したサイクロンがまた戻ってきたのです。Uターンですよ!あとにも先にも、こんなサイクロン見たことも聞いたこともない。しかもさらに凶暴になっていた。

そのため、宿泊ホテルも停電。なんだろうそくの灯りで二晩を過ごしたのです。

で、この2日間も全く何も撮れず。最後はスタッフもやけくそで、小雨の中、バンジージャンプでストレス解消。

ホント、撮影隊にとってお天気は魔物です。

(2011年10月)

実はこの原稿は9月29日に書いています。そして今晚から10日間ほどまた日本に戻ります。

3.11の震災以来2回目。

日本がどんどん壊れているようで本当に悲しい。今現在どんな感じなのか、また自分の目で直接見てみたい。

ところで数日前にメルボルンから電話があった。知り合いの奥さんから。実は彼女、小さなお子さんと現在「親子留学」をしている。たまたま彼女のご主人が日本の某テレビ制作会社のプロデューサーで知り合いということもあり、当初「親子留学」したいと相談を受けた。

そのときは、正直ちょっと難しいんじゃないかと思いました。お子さんも小さいし、彼女も英語力がそれほどではないというし。しかし女性は強いですね。

今年始めにメルボルンにいらして、難問が幾つもあったにもかかわらず、今はかなり快適な生活をしているそう。しかし留学中に、3.11が起こってしまった。そこで彼女考え込んでしまったそうだ。自分のことはさておき、小さな子供のことを考えると日本に帰ることがいいことかどうか。もちろんビザの問題もあるが、しばらくはメルボルンで様子を見たいとのこと。

ご主人も、様子を見にまもなくしてメルボルンに来るという、、、。

しかし、震災以降、日本はますます生きづらくなっているように感じます。

放射能の問題、立ち行かない経済の問題、そして日本独特の「しがらみ」の問題（僕自身田舎育ちだけにこれは実感しています）など。

しかしそんなことを言っても、時は流れる。今後は日本人も各自が試行錯誤しながらでも、サバイバルを考えなくてはいけない。そのための理想は、いろいろな面で、複数の選択肢が持てることじゃないかと思う。収入も、住むところも。今風に言えば、「ノマド」的な生き方かもしれない。

企業も今後は生き残りをかけて海外進出をしてくる。というより、多くの企業に取ってはそれが絶対条件になってくるだろう。（一例を挙げると、最近ある縁で、日本酒のオーストラリアへの輸入、販売のお手伝いをするようになった。理由はオーギーに日本酒の味が受け始めていることもあるのですが、メーカー側にとっても日本はすでにマーケットが飽和状態。しかも少子化で今後も明らかにじり貧状態。海外進出を突破口にしたいそうだ）

そんななか、日本人にとって英語が果たして必要かどうかという論議が盛ん。

皆さんどう思いますか？

少し前まで、いや今でも、「日本人は英語を習う前にまずは自国の文化、歴史を勉強する必要がある」というような意見が根強い。「国家の品格」の藤原正彦さんなんかもそんな意見。僕も以前はそう思っていた。若い時にヨーロッパに英語の勉強に行ったときも、「なんと自分の国のことを知らないんだ！」とあちこちで恥ずかしい思いをしたものだ。

しかし、いまオーストラリアで生まれ育っている子供たちを見ていると、自分の国、他国の文化

なんかは幾つになっても興味さえ持てば十分に勉強できるんじゃないかと実感している。それよりも英語はとにかく小さいときから接するに限る。アジアの子供たちなんかもみんなしゃべっているんだし。

あんまり「日本語」そのものの価値を独特視しない方がいい。文化や歴史の勉強はどこの国の言葉でも（脳みそでも？）大丈夫だから。

あと、英語が本当に必要なのは10%程度の企業だ、といったような本も出ているようですが、現状それでも、この数字は急速にあがっていくことは間違いないし、それなりの企業はそうしていかなくては生き残れない。

まあ、あまり固く考えず、英語なんかは早くから勉強しちゃおう（させちゃおう）が今後サバイバルの一条件になることは間違いないと思っています。

しょせん英語なんて勉強というより慣れなんだから。これ、もちろん僕の勝手な意見ですよ（笑）。



VOL.28 ソーラーカーレースで「チーム沖縄」が大健闘！

(2011年11月)

10月16日からまた恒例の「ワールドソーラーチャレンジ」がダーウィン／アデレード間の3000キロで行われた。今回も前回に続き、ちょっとした縁で取材のお手伝いをさせていただくことに。

結果はすでにご存知の方も多いかと思われませんが、日本の東海大学が優勝（これで2連覇）、2位オランダ、3位アメリカと続きました。昨年同様この3チームの大接戦（しかし、東海大学は本当に強い。あの篠塚健次郎さんも参加しているし、常勝軍団のような風格を感じました）

さて、今回僕が協力させていただいたのは、実は沖縄の地元放送局。今回初出場の“チーム沖縄”の活躍を追っかけるというもの。



しかし、このチームの活躍は想像以上のものでした。今回の世界中からの参加37チームのうち、この沖縄チームだけが唯一の“高校生”チーム。その他はほとんどが大学生チーム。しかも、初参加。

子供たちの勇姿を一目見ようと、お父さん、お母さんがたも2名参加。それも単に参加、応援ではなく、とにかく絶対的にスタッフが足りない（裏方さんも大変なのです）。

お父さんは、搬送車を3000キロも運転するし、お母さんは、スタッフ総勢20名の食事を担当（砂漠をキャンプしていくので大変）。スタッフ全員が過酷なサバイバルレースに参加しているのです。

しかも、今回は予期せぬハプニングが続出。まずは2日目。200キロの範囲にも及ぶブッシ

ユファイアー。このため、全チームが半日程度の足止め状態。さらに、大会4、5日目はこの地域では非常に珍しく雨模様、そして砂嵐も。これが2日ちかく続く。

ソーラーカーはとにかく“太陽”が命。このためほとんどのチームが結果的に完走を果たせず。

そんな中、チーム沖縄は大健闘。結果37チーム中、13位に入った！

しかし、この現場に立ち会わせていただき、驚いたことがたくさんありました。

まずは監督、まだ40過ぎとお若いのですが、なんでも若いときから放浪が好きで、世界中をバックパッカーで飛び回ったそう。英語力も完璧。すべてはこの監督のソーラーカーに懸ける情熱から始まったそう。とにかく、監督、主要ドライバーの顔以外にも、スタッフ20名以上の諸々のお世話役でもある。いわば“表”も“裏”も何でもかんでもやってしまうバイタリティーは凄まじい

。でも一番はなんと言っても子供たちへの接しかた。月並みな言い方をすると「飴と鞭」なんでしょうが、とにかく子供たちを本気にさせるのがうまい。聞いたところ、子供たちも、不器用な子が多く、中には人との関わりが難しい子も。

しかし、10日間いて、その子供たちの表情がどんどん輝いていくのがわかりました。そしてゴールのアデレードでは、みんな大満足。我々テレビ側がリクエストもしないのに（笑）、自ら噴水に飛び込み、狂喜乱舞！





そういえば、もう一つのエピソード。このソーラーカー、とにかくお金がかかる。しかしこのご時世、なかなかスポンサーが集まらない。スタッフたちはみんな手弁当。そこで監督考えました。元々メカが好きで参加してきた高校生たちに“名刺”を持たせ、にわかセールスマンに。そして地元沖縄の多くの企業に協賛のお願いに行かせたとか。そしてその子供たちの熱意が届き、多くの企業が協賛してくれたそうです。競技中は、オリジナルのTシャツも売っていたなあ。しかしこんな砂漠を舞台にした“現場教育”、高校生たちの将来が楽しみです！







VOL.29 月光写真家 石川賢治さん！

(2011年12月)

先月の11日。そう、ゴロのいい2011年11月11日。僕はマンゴ国立公園という、またまたオーストラリアでもとんでもない砂漠にいた。この日が“満月”であったことをご存じの方は少なかつただろう。ビクトリア州の田舎町Milduraからダート道路を走ること約100キロ。荒涼たる砂漠、そして砂丘が一面に広がる。





今回はふとしたご縁で、石川賢治さんというカメラマンとご一緒した。石川さんのユニークなところは、大自然の風景などを、月の光だけで撮影すること。従って仕事の基本は、満月前後の“好天の夜”なのです。いやあ、こんな方がいるとは…。本人曰く「多分プロとしてやっているのは、世界でも僕一人」。

暗くなってから、早速一緒に砂漠へ。途中、カンガルー、エミューの集団がお出迎え（笑）。石川さんが撮影準備をしている間、静かにしていると虫やら鳥やらいろいろな“声”がする。月光の程よい明るさがなんともいえず、これぞ“月光浴”。

「気持ちのいいものですよ」と聞いたが、大きく納得。うーん、広大な空間との一体感というか、何とも言い尽くせない味わい、ホント癒されるなあ。石川さんが「昔は日本でも、月の明かりを実感する時があったと思うけど、今じゃなくなっちゃった」と言っていました、その通りですね。

さて、石川さん、1945年生まれとかで現在60代後半。「体が動かなくなったら引退、いつ現役をやめるかは自分で決められる」。若いころは“秒刻み”で動いていた売れっ子カメラマンだったものの、バブルがはじけると同時に、そんな生活に疑問が。そんな時、日本の地方やサイパンで、月光に出会ったそうだ。その後、世界中を回り、オーストラリアもすでにフレーザー島、ピナクルス、デビルス・マーブルス、グレート・オーシャン・ロードなどを制覇。今回は、月光写真の集大成として来たかったそうです。



これからの石川さんの夢は？ 学生時代の同級生の奥さまと東京に住んでいるそうですが、いずれ故郷の福岡に戻りたいそうです。九州には“神”がテーマの伝説やら、スピリチュアルな場所があちこちにあるそう。そんな所を訪れ、歴史を探りながら、月光で撮っていきたい、そして伝統的な日本の素晴らしさを伝えていきたいそうです。いいですねえ。
興味ある方は作品をぜひご覧あれ。“石川賢治”でネット検索し“月光浴”をお試してください。

以下、参考までに：

[石川さんのホームページはこちら。](#)

下記、ホームページから借用いたしました。





[またこちら、石川さんのツイッターです。](#)

マンガ滞在中の思い出もつぶやいています。